

ビジネス・コミュニケーションにおける受動文の効用

著者	林 純三
著者所属(日)	平安女学院大学現代文化学部国際コミュニケーション学科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	1
ページ	155-164
発行年	2001-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001161/

ビジネス・コミュニケーションにおける 受動文の効用

林 純三

I. はじめに

英語では、主語がある動作を行う、あるいは、ある状態にあることを表す動詞を使って、ある出来事を表現する構文、つまり能動文が普通であるが、これと同時に、動詞の意味の影響を受ける名詞を主語として表現する構文がいくつかある。受動文はその代表である。受動態というのは、主語がある動作を受ける動詞の形態をさしている。(1a)のような能動文をそれに対応する受動文(1b)に書き換える練習は、学校文法で取り入れられている。

(1) a. Betty hit Jack.

b. Jack was hit by Betty.

このような書き換え練習では、能動文と受動文を、ともすれば短絡的にその意味をイコールで結びつける。もっとも、両者はその叙述内容は変わらないとしても、話し手の態度、観点などから見る語用論的意味は変わる。能動文は unmarked(無標の)受動文は marked(有標の)と言われるように、academic non-fiction text での平叙・肯定文においては、能動文が使用されている比率は82%で、受動文は18%という。^{注1)} 本稿では、このような事実をふまえ、能動文と受動文の異義性を探り、そこから使用頻度が18%という受動文の使いみちを、とりわけ、ビジネス・コミュニケーションの見地から、どのように理解し、効果的に使い分けていけばよいのかを考察する。まず、能動文と受動文の仕組みを見る。

II. 能動文と受動文の仕組み

上記の能動文(1a)から受動文(1b)に転換するための手続きは、次の通りとなる。

- 能動文の目的語(Jack)を受動文の主語とする、
- 能動文の主語(Betty)を受動文の動作主(agent)とする、その際、動作主は by-phrase (by Betty) で表される。ただし、これは随意的(optional)である、
- 能動文の動詞(hit)を「be+過去分詞」(was hit)とする。

能動文(1a)とその受動文(1b)のなかでベティはそれぞれ位置や機能が異なっているものの、hit という動作の行為者であり、この両文の叙述内容は同じである。しかし、能動文をわざわざ上記の手続き操作をして受動文にする理由は何であるのかを考える時、そこに受動文の存在意義が意識される。事実、受動文は能動文の再構築(restructuring)とも云われ、単純に語順を変えたものではない。この再構築を、1. 視点、2. by-phrase の有無、3. 'be+(他動詞の)過去分詞' の意味という3つの観点から見ていくことにする。

1. 視点

(1a, b)の例文で「ベティがジャックを殴った」という出来事を表現するために、hit という動詞を使うと、動作主(Betty)を主語に、被動者(Jack)を目的語にして(1a)のように表現する。この(1a)では、話し手がベティ寄りの視点から描写しているとも、ジャック寄りの視点から描写しているとも、あるいは両者に対して中立の視点から描写しているとも考えられ、いずれであるかを示す構文上の手がかりがない。^{注2)} けれども(1b)の受動文では明らかに話し手が被動者のジャックよりの視点から描

写している。

受動文について「表層構造の視点ハイアラーキー」として、久野(1978)は、視点の面からの序列を位置づけているが、^{注3)}そこで受動文の旧主語(対応する能動文の主語)がby-phraseのような位置を占める理由を次のように規定している。

- 受動文では、わざわざ行為主体を主語の位置から外し、行為対象を主語の位置に据えるのであるから、話し手はこの構文パターンを用いる時は、何か特別な理由、即ち、行為対象に対する視点的接近がなければならない。

ここで「わざわざ」という語が示すように、受動文は作り出すのにある種の努力を必要とする“コスト”の高い構文である。コストを掛けるからにはそれなりの動機、即ち、視点の位置に関する操作の意図がなければならない、^{注4)}ということである。したがって、受動文は、話し手がある出来事を受動文の主語寄りの視点から描写しているということになる。

2. ‘by-phrase’の有無

受動文では、対応する能動文の動作主がby-phraseによって表されるが、実際には動作主を表すby-phraseは80%－85%の割合で現れないとされる。^{注5)}『これは受動態には一般に「能動文の主語を隠す」という機能があるためである。by-phraseがわざわざ用いられている場合には、受動態は「能動文の主語を文末という新情報(NEW INFORMATION)を担う焦点(FOCUS)の位置に置く」という機能をもつことになる。』^{注6)}ということに基づく。動作主がby-phraseで表される受動文をthe long passive、by-phraseがない受動文をthe short passiveと言うが、かなりの受動文がthe short passiveであるという事実は、文末焦点の位置を占める動作主を表面に出すことを隠すという意図がある。

3. ‘be+過去分詞’の意味

受動文には、動作を表すものと状態を表すものの2つがある。動作受動態(actional passive)と状態受動態(statal passive)である。

ある完結した結果を生じる動作を表す動詞を完結動詞(shut ; kill ; finish ; write など)、完結を目標としないで始められる動作を表す動詞を非完結動詞(admire ; love ; see ; praise など)と言う。この完結動詞(conclusive verb)の受動態は、動作と状態を表す2つの意味があり、曖昧となって、そのいずれかを判断しなければならない。次の(2a)では「彼はいつ埋葬される予定ですか」と完結動詞のburyは「動作」の意味で、(2b)では「彼はクロイドンに埋葬されている」と「状態」の意味で使われている。

(2) a. When is he to be buried? (動作)

b. He is buried at Croydon. (状態) ^{注7)}

これに対し、(3)のように、非完結動詞(non-conclusive verb)の受動態は「状態」を表して「動作」を表すことはない。

(3) a. Mary is loved by John. (状態)

b. He is admired by everybody. (状態)

このように、能動文の動詞が、受動文ではその主語と目的語を消失し、主語はby-phraseに、目的語は受動文の主語に、動詞は「be+過去分詞」に置き換えるということは、能動文の動詞のもつ「他動性」(transitivity)に大なり小なり「自動性」(intransitivity)が入り込み、「自動詞化」(detransitivization)するものと思われる。とすれば、その動詞の意味によってその大きさは異なるが「状態化」(stativization)に繋がってくるのではないか。つまり、能動文でその動詞の他動性がもつ直接的な、簡潔な、強調的な特性を、あえて「弱めて」伝えようとする場合に、受動文は格好のものとなる。また同時に、この「状態化」は「形容詞化」に通じ、そこで形容詞として機能することにもなる。

以上をまとめると、コストをかけて作り出す「受動文」は、被動者寄りの視点から描写し、動作主

を by-phrase で焦点の位置を占めさせるか、あるいは多くの場合、意図的に隠そうとし、それに対応する能動文の動詞の他動性を受動文では大なり小なり状態化させる構文ではないか、ということになる。そこで、このような受動文のもつ意味特性をさらに探るために、次に受動文が成立するための意味的要件を見る。

Ⅲ. 受動文の成立の意味的要件^{注8)}

受動文が形式から十分に用件を満たしているが、あるものは適格であり、あるものは不適格となる例を見る。次の(4a,c)は適格であるが、(4b,d)は不適格となる。(＊印は不適格を示す)

- (4) a. I was approached by the stranger.
 b. ＊I was approached by the train.
 c. The page was turned by George.
 d. ＊The corner was turned by George.

これについて、Bolinger(1975)は、能動文の目的語が動詞の表す行為によって真に影響を受けている(affected)という制約を提案した。(4a)では「私」が「見知らぬ人」に近づかれて心理的な影響を受けたと考えられるが、(4b)では、駅で「電車」を待っている「私」に「電車」が近づいてきても、両者の距離が縮まるだけで「私」は通例何の影響も受けない。同様に(4c)では、ある本の「ページ」を誰かがめくることによって影響を受けると考えられるが、「街角」を「ジョージ」が曲がっても「街角」は何ら影響を受けない。ところが、「影響」の制約では説明のできないものが出てくる。次にその例をあげる。

- (5) a. Mary is loved by John.
 b. Mary was given a book by John.

(5a)では「ジョン」が「メアリー」を愛しているにしても「メアリー」がそれを知らなければ影響を受けているとは考えられないし、(5b)では「メアリー」が「ジョン」から本を貰っているため、主語の「メアリー」の意味役割は、被動者ではなく着点(goal)である。とすると、上記の制約では説明できない。

そこで、久野(1983)は、インヴォルヴメント(involverment)という制約を提案することになる。それは「受動文の主語は動詞の表す行為や状態に関与していなければならない」というもので、これで(5a,b)は説明が可能となる。(5a)では「ジョン」が「メアリー」を愛することによって「メアリー」は意識している、していないに拘らず「ジョン」の愛の対象としてその愛するという心理状態に関与している、(5b)では「ジョン」が「メアリー」に本を与えた結果「メアリー」に対して何かがなされた」と解釈される。ところが、さらにこのインヴォルヴメント制約で説明できないものも出てくる。

- (6) a. ＊I was waited for by Mary.
 b. I don't like to be waited for.
 c. ＊The bridge was walked under by the dog.
 d. This bridge has been walked under by generations of lovers.

対応する能動文の前置詞の目的語が主語となっている疑似受動文と言われているものであるが、インヴォルヴメント制約では(6)のすべての受動文を不適格とすることになる。「私」が待たれたり、「犬」や「恋人たち」が「橋」の下を歩いても「私」や「橋」には何もなされていない。そこで、高見(1995)は疑似受動文について「特徴づけ」(characterization)制約を提案する。それは「疑似受動文の主語はその文の他の要素によって特徴づけられていなければならない」というものである。この制約は、主語が持っている性質、属性、さらに他のものや人から際立たせるような出来事や状態が述べられているということに注目している。(6b)では「私」が人を待たすのが嫌いで、いつも早めに行くようにして

いるということが「私」のひとつの特徴であることを示し、また(6d)では「何世代もの恋人たち」が「橋」の下を習慣的に歩くという行為が述べられており、その結果その「橋」が特徴づけられているとする。以上から「英語の受動文はインヴォルヴメント制約か、特徴づけ制約のどちらかを(あるいはどちらをも)満たしている場合に適格となり、そうでない場合は能動文で表現しなければならない」とする。

この2つの制約の存在から、受動文が成立する要件は、統語上の問題ではなく、あくまで意味の問題であることがわかる。

以上の考察をふまえて、ある出来事や状態を描写する時に、どのような要因によって能動文よりも受動文が好んで使用されるのかを、具体的な事例とともに見ることにする。

IV. 受動文が好まれる要因

これについては Jespersen が次の6点を指摘している。^{注9)}

- (a) 能動態の主語がわからないか、容易に表せない場合
- (b) 能動態の主語が文脈から明瞭な場合
- (c) 遠慮・気がねなどのため主語を示さないほうがよいと考えられている場合
- (d) 能動態の主語よりも受動態の主語に、より大きな関心をもつ場合
- (e) 文結合を容易にする場合
- (f) 受動態は文語体に多い

(a)–(c)は by-phrase の有無に関するもので、これを1つにまとめる、(f)は標準英語(standard English)では非標準英語(vulgar English)より遥かに多くの受動文が使用されている事実を指摘しているが、ここでは標準英語としてのビジネス・コミュニケーションを前提としていることから(f)を除き、(a)–(e)を次の3点にまとめて考察する。

- 1. 動作主がない (a)–(c)
- 2. 能動文の目的語寄りの視点 (d)
- 3. 情報の流れ (e)

1. 動作主がない

動作主が現れていないということは、動作主がわからない、容易に表現することができない、文脈から明瞭である、あるいは、聞き手にとって関連がない、さらには、遠慮・気がねなどのため主語を示さないに基づく。要は、動作主を表現しようとしてもはっきりしないか、動作主を意識的に表現しないかということになる。

(7a)では、動作主は表現しにくいもの、また(7b,c)は、表現しようとしても、それぞれ、by someone, by anyone という不定の(indefinite)ものとなる例である。It is assumed that...(cf. People assume that...)も同類である。

- (7) a. My grandfather was killed in the war.
- b. I have been insulted! (by someone)
- c. Yuca can be bought at any Cuban grocery. (by anyone) ^{注10)}

次の(8a,b)は、動作主を意識的に表現しない例である。

- (8) a. The plane was brought down safely.
- b. Mr. Levin was called to the office at midnight.

(8a)は、動作主が pilot であることは自明のこと、(8b)は、聞き手にとって誰が呼び出したかは関連のないことで、それぞれ動作主は表していない。このように意識的に動作主を表現しないという技法は Jespersen が指摘する「遠慮・気がねなどから動作主を示さないようにする」という方略につなが

る。これは、英語での受動態の機能の中心を占めるものといっても過言ではない。次はその典型的な例である。

- (9) a. There will be some redundancies as a result of the fact that the new computer program will be introduced.^{注11)}
 b. There will be some redundancies as a result of the fact that we will introduce the new computer program.
 c. I was given the wrong information.^{注12)}
 d. You gave me the wrong information.

(9a)では、ある会社で事務職員の削減を発表する場合その会社の経営者は(9b)のように、...we will introduce the new computer program.とするよりも、むしろ we 主語を避けて受動態を用いるであろう。(9c)では能動態を使うと誤った情報を教えたのは誰なのかということを文頭に置かなければならない。(9d)は You are the person who gave me the wrong information.と、相手に面と向かって非難していることになる。受動態を使うと、相手の顔を傷つけることなく、同じ内容を伝えることができる。間違った情報の出所を受動態にして一番最後に置くようにして、さらに、それを隠している。このような受動態を使って相手の顔を傷つけないようにする技法は、丁寧性(politeness)に関わる方略の1つとして Brown and Levinson(1987)の指摘するところである。^{注13)} 次も同様の例である。^{注14)}

- (10) a. After an assessment of the most recent cost over-runs, the decision has been made to cancel the planned extension of the new store.
 b. After an assessment of the most recent cost over-runs, we/the committee/the management decided to cancel the planned extension of the new store.
 c. Before you open an account, the application forms must be completed.
 d. Before you open an account, you must complete the application forms.

(10a)で、対応する能動文である(10b)の動詞である decide を decision と名詞化し、この部分を受動態として、動作主を表現しないようにしている点にも目を向けたい。また(10c)は相手に指示を出したり、依頼をする場合に受動態を借りて間接的なアプローチにする例であり、取引を始めるに当たって申し込み用紙に記入する指示を、..., you must complete the application forms.と命令的にならないようにしている。あるいは you を主語として..., you are requested to complete the application forms.とすることもできる。

2. 能動文の目的語寄りの視点をとる

これは、能動文の目的語がその主語よりも重要である、つまり、その主語よりも目的語寄りに視点を向け、それを表現しようとする時に、その目的語を主語の位置におくことは、受動文にするということにもなる。^{注15)}

- (11) a. The letter was written by the chief scientist and signed by the managing director.
 b. Business practice will be changed considerably by the new tax laws.

(11a)では the letter に、(11b)では business practice に視点を向け、目立たせている。ただ、英語の視点で理解しておかねばならないことは、インヴォルヴメント制約と特徴づけ制約からわかるように、能動文の対象である人、もの、ことがインヴォルヴしていること、あるいは、その特徴を述べるためであることが受動文の大切な部分であって、主語の位置を占めることは二次的なことである。これを裏づけることは、能動文で主語の位置を占める動作主が、対応する受動文では姿を消していることが断然多いという事実は「能動文の動作主を隠すために」受動態を使用するところに受動文の存在意義があることを語っている。従って、この目的を達成するために能動文の目的語を受身文の主語にするのであり、その結果、その目的語寄りの視点をとるということになるからである。

この(11)で、あわせて考慮しなければならないことは、次の3.で触れる「情報の流れ」の観点から by-phrase に文末焦点(end-focus)を見て取ると、(11a,b)では、それぞれの動作主の the chief scientist と the managing director、それに the new tax laws を新情報として強調していると理解することもできる。これは動作主を強調するために、受動態が用いられる用法で、動作主を by-phrase で示し、文末に置いて、文末焦点ををもたせるようにする技法である。

3. 情報の流れ

上記のように、情報の原則(information principle)に基づいて、能動態と受動態のどちらかを用いるという選択が行われることがある。この原則は「文は、すでにわかっている情報(old or given information)で始め、文末のほうに新しい情報(new information)を据えるのが通例である」ということで、これは、できることなら、主題(theme)を旧情報のものにしておきたいということがあるからである。^{注16)}

(12) a. Bill has just scored a goal.

b. A goal has just been scored by Bill.

(12)は、聞き手がビルという人物をすでに知っていて、彼が得点をあげたということが新しい情報である場合で、(12a)の能動態のほうが(12b)の受動態よりもずっと自然である、としている。けれども、次の(13)では、受動態が自然となる。What happened to that car? に対する応答であるからである。

(13) a. It was hit by a falling tree.

b. A falling tree hit it.

(13)の it は、先行文で言及された既知の情報である that car を表し、倒れてきた木によって車が壊されたということが新情報であるから、情報の流れは「旧」から「新」への原則に沿っており、(13b)よりも(13a)のほうが自然である。

この傾向は、談話におけるトピックの連続性という原則にも繋がってくる。

(14) My daughter Alice works in a bank. Last week she was called to the supervisor's office because a customer had complained about her behavior. Alice was not allowed to defend herself. She was suspended for a week without pay. Of course she was shocked by this callous treatment.^{注17)}

(14)で、アリスは明らかにこのストーリーのトピックで、最初の文で紹介され、続く4つの文では、アリスが主語となり、トピックとして維持されている。このように「主題の連続性」という原則に基づいて受動態が使われている例である。

ここでは、受動文が好まれる要因を、1. 動作主がない、2. 能動文の目的語寄りの視点をとる、3. 情報の流れ、の3つにわけて見たが、これらの要因をふまえて、メッセージの発信者がコミュニケーションの方略として、どのように受動文を利用することができるかを知ることができる。1.の「能動文の主語を表現したくないから受動文を使う」ということから、まず、Jespersen の云う「遠慮、気がねなどの理由」があげられる。この遠慮、気がねは、その性格上、責任の所在が1人称、あるいは、場合によっては2人称であることが多くなる。とすると、伝えるメッセージの内容が自分がコントロールできることで、それが相手に良くないニュースである場合に、一人称の I/we を隠そうとすることから受動態を使用することになる。また、その責任が相手にあるとする場合にも、you を主語として表面に出すことを避けるようにすることにもなる。先に触れたが、相手の顔を傷つけないように配慮する「丁重性」に関わる方略である。1人称で始める能動態の構文を、その目的語を主語に据えることになり、その動詞のもつ他動性をやわらげ、非人称化しようとする表現にすることにも通じてくる。

2.の「能動文の目的語よりの視点をとる」では、上記のように、英語では、視点の移動は二義的なもので、その目的語がなにかに関与している、あるいは、その目的語の特徴づけをするために受動態

が選択されることになる。受動態は、その動詞のもつ他動性を状態化させ、ひいては、形容詞化させることにもなって、主語の状態や属性を叙述するためにも使用されることが多いことになる。つまり受動文は能動文の主語でない要素を受動文の主語にして、その主語が動詞の表す行為や状態にインヴォルブしているか、述部によって特徴づけるための構文であると言える。

また、3. 情報の流れの観点では、メッセージは本来的に単独文(single sentence)であるよりも、むしろ複数の単独文からなる文章(text)である。従って、そのメッセージの受け手にとって理解のしやすいものでなければならぬし、また、その一端を担う情報の流れの「旧」から「新」へ、ひいては「主題の連続性」の原則に発信者は十分に注意を払う必要がある。次に日本語の受動文を見ることによって英語の受動文の性格を考える。

V. 日本語の受動文

日本語では、次のような、いわゆる「被害／恩恵の受身」が中心となる。

- (15) a. 君は帰り道、雨に降られたんですか。
b. 私は母に日記を読まれた。
c. 僕は贈り物を先生に喜ばれて、うれしかった。

(15a)を能動文にすると「雨が帰り道君に／を降った」となり意味をなさない。(15b)も同様である。これは「固有の受身」とも言われているが、これが固有であるというには、その理由がある。日本語の受動文では、英語と違って視点が大きく働く。

- (16) a. *このコンピュータは太郎に使われている。
b. このコンピュータは太郎に壊された。

日本語ではひとつの出来事に「人」と「もの」が係わる場合、一般に「もの」よりも「人」に視点をあててその出来事を描写しやすく、その視点を当てている要素を主語の位置に置きやすい。従って(16a)は、「人」である「太郎」よりも「もの」の「コンピュータ」が先にくて主語となっているため、非文となるが、これが、被害を意味する(16b)になると、その視点の制約を否定して適格となる。もちろん日本語の受動文でも英語と同様にインヴォルヴメントや特徴の意味制約も存在するが、この「固有の受身」が受動文の中心となる。日本語の受動文では、上記のように、視点関係が大きく関与してくることから無生物を主語として受動文を作ることに制限が生じてくる。これを逆に考えると英語の受動文では、視点関係が日本語ほどに関与しないので、無生物主語の受動文が日本語よりもかなり自由に産み出すことができる。事実、(16a)に対応する英語の *This computer is used by Taro.* は適格である。このことは、英語では他の構文でも無生物を主語にして(人を目的語にする)構文の組み立てができるということにも繋がってくる。このように、日本語の受動文では、視点関係の制約がある、また、被害受身の解釈を産み出す固有の構文があることで英語の受動文とは大きく異なる。従って、英語では、日本語に較べかなり自由に受動文が作られ、その利用範囲も比較的に大きいことになる。ちなみに、英語では被害を表す構文は *Mr. Tanaka had his wife run away (on him).* (田中氏は奥さんに逃げられた) のように別の構文を用いる。

もうひとつ、日本語の受動態の動詞の部分に表れる「れる・られる」の多義性に注目したい。この助動詞の「れる・られる」は、「受身」の意味のほか「自発」(俥ばれる)「可能」(食べられる)「尊敬」(来られる)があり、歴史的に「自発」がもっとも早く使用され、次いで「受身」「可能」と続き「尊敬」がいちばん遅く使われたという。^{注18)} 英語でも「be+過去分詞」の部分に意味の変化が起ってくるのも当然のこととしてうなずける。

最後に語彙レベルから受動態になじむものを概観する。

VI. 受動態によく使用される語彙

最後に受動文に関し考慮すべきは語彙的な要素で、受動態によく使用される動詞があるという事実である。^{注19)} 一般的によく使われるものを引用する。

made	given	used	found	seen	shown
considered	done	called	concerned	expected	set
left	described	determined	involved	needed	required

また、アカデミックの分野では、

applied	chosen	compared	developed	discussed	explained
formed	introduced	observed	regarded	studied	suggested

ニュースの分野では、

accused	announced	arrested	believed	charged	hit
injured	jailed	killed	released	revealed	shot

会話の分野では、

bothered	allowed	finished	involved	left	married
----------	---------	----------	----------	------	---------

などがある。アカデミック、ニュースの分野での語彙はそれぞれのジャンルの特徴を示している。

では、ビジネス・コミュニケーションの分野ではどうか。これは、コーパスによる結果を待たねばならないが、やはりビジネスのプロセスでよく使用される表現の中で、受動態になじみやすい動詞がある。上記の分野でそれぞれあげられているものから拾い出すと、

considered	developed	discussed	explained	found	given
introduced	made	regarded	required	shown	studied
suggested	used				

などは、比較的によく使用されるものであろう。この他に、

attached	billed	broken	changed	charged	damaged	delivered
designed	dispatched	enclosed	held	mentioned	promoted	provided
quoted	reached	reminded	returned	received	refunded	scheduled
sent	shipped	told				

などがあげられるであろう。このような動詞を見ると、他の分野の動詞と同様に、他動性の強い動詞は受動態になりやすく、また、ビジネス・コミュニケーションでは、このような動詞の動作主は1・2人称であることが多く当事者には自明のことで、そのような動作主を隠そうとすることによって、目的語寄りに関心が払われることによって、受動文になるケースが多くなるのは当然の成り行きである。

VII. おわりに

英語で能動文を受動文にすると適格でないものが出てくる。これは統語的な問題ではなく意味的な要素の反映である。このことは能動文には能動文の、受動文には受動文のそれなりの役割がそれぞれ別個にあるということを暗示する。次の例文も両者の違いを教えてくれる。

(17) a. Every man loves some woman.^{注20)}

b. Some woman is loved by every man.

(17a,b)は文法的な文であるが、(17a)は次の(18a,b)の解釈が可能であるが、(17b)は(18a)の解釈は不可能に近いという。

(18) a. For each man there is a woman he loves.

b. There is a woman such that every man loves her.

能動文では明らかに存在した多義性が受動文では消失してしまっている。つまり受動文では能動文で

観察できない意味的な変化が起こっているということである。本稿で見てきたように、能動文と受動文の間の「主語の違い」「動詞の形の変化」「by-phraseの有無」など「わざわざ」リストラする「目に見える」手続きのなかで「目に見えない」意味的な変化が起こっているのである。ひいては受動文に特有の意味特性を産み出すことにもなる。「異なる形式は異なる意味に対応する」という Bolinger の原則を裏づける一例である。

注

- 1) Givon (1993), p. 53.
- 2) 高見 (2000), pp. 94-95.
- 3) 久野 (1978), p. 163.
- 4) 金水 (1992), p. 12.
- 5) Berk (1999), p. 120.
- 6) 安井 (1996), p. 528.
- 7) 安井 (1996), p. 529.
- 8) 高見 (2000), pp. 42-64. (このⅢ. は高見の論に従う)
- 9) 大塚 (1970), pp. 740-741.
- 10) Berk (1999), p. 121.
- 11) Sligo (1988), pp. 277-282.
- 12) 東 (1994), p. 109.
- 13) Brown and Levinson (1987), pp. 273-275.
- 14) Sligo (1988), pp. 280-281.
- 15) Sligo (1988), p. 279.
- 16) 安井 (1993), pp. 288-289.
- 17) Berk (1999), p. 120.
- 18) 柴谷方良 (1998). (関西言語学会夏期講習会の講演による)
- 19) Quirk (1999), pp. 477-481.
- 20) 杉本 (1998), p. 34.

参考文献

- 荒木一雄 (1999) 『英語学用語辞典』 三省堂.
- 東 照二 (1994) 『丁寧な英語・失礼な英語』 研究社.
- Berk, M. L. (1999) *English Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givon, T. (1993) *English Grammar II*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- 金水敏 (1992) 「場面と視点」『日本語学』 8月号, pp. 12-19. 明治書院.
- 町田健 (2000) 『生成文法がわかる本』, 研究社.
- 大塚高信 (1970) 『新英文法辞典』, 三省堂.
- Quirk, R., Greenbaum, S., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 西光義光 (1997) 『英語学概論』 くろしお出版.
- Sligo, F. (1988) *Effective Communication in Business*. Palmerston North: Software Technology (NZ) Ltd.

杉本孝司（1998）『意味論 1－形式意味論』 くろしお出版.

Quirk, R. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, London : Longman.

高見健一（2000）『機能的統語論』 くろしお出版.

安井稔訳（1993）『現代英文法総論』 開拓社. (Declerck, R., *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* (1991) Kaitakusha.)

安井稔（1996）『コンサイス英文法辞典』 三省堂.

An Effective Use of the Passive in Business Communication

Junzo Hayashi

Voice is a category used in the grammatical description of sentence or clause structure, primarily with reference to verbs, to express the way sentences may alter the relationship between the subject and object of a verb, without changing the meaning of the sentence. (Crystal 1997 : 413) This changelessness only refers to its propositional meaning, and there are some marked alterations between the two voices in terms of semantic perspective. This is why the passive involves a restructuring of the clause, and thus it is not a simple order variation. (Quirk 1999 : 935)

In fact, the passive takes two forms : the long passive when the agent is expressed in a by-phrase, and the short passive when the agent is left unexpressed. Particularly, in business communication, the passive serves the discourse functions of cohesion through ordering of information and omission of information (especially the short passive) and weight management (especially the long passive). This paper intends to look at some original functions of the passive with which the active is not actually gifted.